

蒲生先輩を悼む

前田 和泉
MAEDA Izumi

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.25–26.

蒲生先生は神奈川県立湘南高校の2年先輩だった。私とは専門分野も違うし、2学部に分かれた後は担当学部も別になったので、日常的に接点がある方ではなかった。ただ、私が本学に着任した当時、奇遇なことに湘南高校の関係者が他にも何人かおられた。ドイツ語の相馬保夫先生、文化人類学の栗田博之先生、ペルシア語の佐々木あや乃先生といった先輩方、それに体育の阿保雅行先生はかつて湘南高校で教えておられたという奇縁もあった。せっかくこんなに同窓が集まっているのだから、と佐々木先生が発起人となって、確か阿保先生が定年退職を迎えられる年にささやかな懇親会を開いたことがきっかけとなって、それから年に一度、「湘南の会」と称して親睦会を開くようになった。

同じ高校の同窓というのは、やはりそこで10代半ばの3年間で過ごした者にしかわからない「共通言語」がある。たとえば湘高出身者なら、たとえ世代が違っていても「縄跳び」「体育祭」「浦高戦」というワードだけで通じ合える（おそらく第三者には何のことだか全くわからないだろうけれど）。普段はあまりお話しする機会のない蒲生先生も、「湘南の会」では同じ空気感を共有する同窓の顔を見せてくださった。大先輩の栗田先生と「湘高あるある」話に興じたり、お二人ともヘビースモーカーだったので、ニコチンが切れると二人で席を外していそいそと一服しに行く様子は、ちょっと不良の男子高校

生っぽい感じがして、なんだかとても微笑ましかった。

私は2019年に点検評価担当の学長特別補佐に任命されたが、実はここでも蒲生先生は「先輩」だった。私が引き継ぐまで、長きにわたって本学の点検評価業務の中核を担い続けてきたのが蒲生先生だったのである。点検評価というのは因果な仕事だ。要するに外語大という組織やカリキュラムを点検し、その瑕疵を改善する道筋をつけていくことが求められるわけだが、長年の因習や不合理を正すのは簡単なことではないし、認証評価や法人評価などでは膨大な書類と格闘しなくてはならない。そもそも自分の所属する組織の「あら探し」のようなことをするのは、精神衛生上も決して気持ちのいいことではない。それを蒲生先生は10年間続けてこられたのである。蒲生先生から引き継いだ大量の資料には、その10年間の苦闘の跡が刻み込まれていた。そして、引継ぎの際には、当事者でなければわからないような詳しい情報や、業務を進める上でのコツを伝授していただいた。自身のご苦勞に関してはあまり多くを語らない方だったが、「ここを押さえておけば大丈夫」という大事なポイントを伝えてくださっていたのだと、学長特別補佐を務めた2年間で何度も実感した。

専門分野や学部が違っていたので、蒲生先生が研究者・教育者として何を考え、何を目指していたのか、というようなお話をすることは



なかった。ただ、学生思いの方だということはあちこちから耳にしたし、また、ちょっとした言葉の端々からもそのことは感じられた。たとえば、基礎演習で担当したロシア語の学生のことを私に話してくださったことがある。その学生はほとんど出席せず、結局単位を落としてしまったのだが、「頭のいい子だったんですけどね」と蒲生先生は残念そうに語っておられた。実際、頭の回転のよい学生で、ただメンタル的な問題があって不登校が続いていたのだが、ロシア語の担当教員である私であればいざ知らず、週に一度の基礎演習を担当しただけ、しかもほとんど出席もしていなかった学生のことをそれだけ見抜いていたのには驚かされた。誰もが担当したがらない1年必修科目の学術リテラシーをずっと中心となって運営しておられたのも蒲生先生で、カリキュラムが改編されてこの科目がなくなった後も、再履修者のためのクラスを最後まで責任をもって担当してくださった。そのおかげで救われた学生は少なくない。

そうやって見えないところで、人の嫌がるような業務も献身的にこなしておられる方だった。いつも夜遅くまで大学に残って仕事をされていたので、私もたまに帰りが遅くなる時には多磨駅でお見かけすることがあった。大柄な背を少し丸めて、夜のプラットフォームに佇む姿を思い出す。一日の仕事が終わった帰途、物寂しい駅の一隅で何を思っておられたのだろうか。改修され、見違えるようにきれいになった多磨駅に、もう蒲生先生はいない。今はただ、ご冥福をお祈りするのみである。